

(9) 礼節をとりあげ、おのおのの内容をきわめて具体的に記述しその分析を試みている。このうち、たとえば“Nak Leng”などという概念ひとつをとってみても、これがタイの政治家に要求される重要な資質であるにもかかわらず、これまであまり人の注意をひかなかった。(a rogue; a rascal; a dishonest and unprincipled person (McFarland) などの訳語からはこの語がある context においてもつ特殊の内包——日本語の「親分はだ」にやや類似している——を想起することは困難であろう。)

また“Chao Nai”であるための条件として、(1)国王または国家によって名誉ある地位を与えられること、(2)机に坐って仕事をするか、あるいはまったく行事も為さずして、しかも生活に困らぬこと、(3)「家来・子分・付き人 (Phu Tittam)」をもっていること、などの点をとりあげ、タイ人の中には、額に汗して労働にはげむ農民をいやしみ、かえって無為に日々を過ごす playboy の方を高く評価する傾向さえある点を指摘していることなども興味深い。

第3部は地域開発指導員の manual を目指したもので、地域開発の理論と実践につき4章にわたり論じている。補遺の「地域開発局の事業」(第11章)は、同局設置の沿革と現状につきのべており、研究者の参照すべき基本的重要性をもつ文献といえよう。

(石井米雄)

Choop Karnjanaprakorn: *Municipal Government in Thailand as an Institution and Process of Self-Government*. Institute of Public Administration, Thammasat University, Bangkok, 1962. xxvi + 249pp.

著者は、現在タマサート大学行政研究所のAcademic DivisionのDirectorであるが、研究生活にはいる前には、内務省官僚として約10年間地方行政の実際にたずさわわり、その間Municipal Governmentに関する法令の制定、その機構改革にも直接関係した経歴を有する行政学者である。以上の経歴からみても、著者が主題に関する第一級の適任者たることはあきらかであるが、実際本書においては、著者の豊富な経験と、米英留学をふくむ広汎な研究活動からえられた学問的知識とが理論的に見事に整理・総合されている。目下のところ、本書に比肩しうるような類書はほとんどみあ

たらな、いってよい。

さて、タイのMunicipal Governmentは、1932年の革命につづく行政の地方分権化の一環として「上から」導入されたもので、1933年に最初のMunicipal Actが制定されている。その後幾度かの改革がなされたが、1963年現在、3つの市(Nakorn)と82の町(Muang)、35の村(Tambol)に「自治」が認められている。

本書においては、タイにおけるMunicipal Governmentの形成期たる1932～1957年の間における、その機構と運営の実際が直接の対象とされている。しかし著者の主たる関心は、むしろMunicipal Governmentより一般的には「地方自治」に関する中央政府の政策、その政策実施にあたっての政府官僚の行動様式の分析におかれている、といつてよい。その際著者は、たんなる記述的方法に満足せず、最近の行動科学的アプローチをも採用して、上述の諸問題をタイの文化的伝統、社会的経済的背景等にまで掘り下げて解明しているが、例えば「地方自治」未発達の要因の一つとして、タイ官僚制にみられる「温情主義」の伝統と政府を「慈恵的」なものとするタイ人民の心理的態度を指摘するなど、随所にするどい分析が示されている。その分析を一貫する著者の問題意識は、「西欧文化に起源する地方自治」制度のタイにおける定着・発展の可能性の問題である。著者は、Municipal Governmentの活動領域が拡大するに比例してかえって中央政府のコントロールが強化され、「自治」が制限される傾向が認められることを指摘しながら、しかし、例えば村レベルの指導者の選挙にみられるように、タイにもグラス・ルーツ・デモクラシーが存在しており、よき指導が適切になされるならば、地方自治の発展も期待できないことではないとしている。

最後に本書の構成を簡単に述べておくならば、序章につづいて第一章「地方自治の起源と発展」、第二章「現行のMunicipal Governmentにおける伝統的觀念の支配」、第三章「内務省の役割」、第四章「Municipal Governmentの機構：立法機関」、第五章「Municipal Governmentの機構：その行政機関」、第六章「Municipal Governmentの機能と財政」、第七章「結論：Municipal Governmentに関連する若干の問題の分析」という章別になっている。

本書は、その標題からみても、またその章別の構成

からみてもまぎれもなく行政学の分野に属するものである。しかし、同時にタイの政治的文化に関する研究であり、かかる視点からみてもきわめてすぐれた業績である。
(福島徳寿郎)

Joseph B. Kingsbury and Robert F. Wilcox: *Introduction to the Principles of Public Administration in Thailand*. Institute of Public Administration, Thammasat University, Bangkok, 1961. 122pp.

タイ国政治の研究者として著名なウィルソン教授は、タイの政治を理解するためにもっとも基本的なことは、この国の統治構造における行政機構の地位と役割を正しく認識することであり、それは事実上「権力問題」に先行する重要な問題である、と指摘している。事実、タイの官僚機構は、伝統的に、権力斗争に対してはつねに中立性を保ちながら、しかも機能的な独立性と組織的な統一性を維持してきており、政治指導者のひんばんな交替にもかかわらず行政の一貫性が確保されてきたのは、官僚機構のこのような特性と役割に負うところが大きい、ということはいさしは指摘されているところである。かかる重要性にもかかわらず、タイ国行政に関する文献は、若干のモノグラフィーを除いて、わが国にはあまり紹介されていないように思われる。

本書は、表題からも判るように、タマサート大学行政研究所に客員教授として招聘された二人の行政学者が、テキスト用にまとめたまったくの入門書である。従って、本書に、各論点についての詳細な叙述分析を期待することはできないが、しかし一応行政の全側面が要領よくまとめられており、タイ国行政の全貌を把握するためには便利な概論書であるといえよう。122ページの薄い本ではあるが、二段組みになっているので、ページ数のわりには取り扱われている問題は多岐にわたっている。

本書は15章に細分化されているが、大別すれば四つの部分——行政および行政学に関する総論的叙述(第1～2章)、タイ国行政発展の略史(第3章)、各論的諸問題の分析(第4～14章)、およびタイ国行政の評価(第15章)から構成されている。各論的部分においては、行政の組織、管理、人事行政、財務行政、行政に対するコントロール、行政責任の問題が扱われてい

る。全体として、行政学の最近の理論的成果を集約しながら、それに照らしてタイ国行政の特質と問題点を明らかにするという叙述形式がとられている。

著者達がタイ国行政のもっとも重大な欠陥として強調している問題は、行政の政治的、道徳的な無責任性と非能率性である。政治的無責任性の克服のためには、政党の育成と自由な選挙の実施なかつく利益集団その他の自発的な市民組織の発展の必要性を指摘し、道徳的無責任すなわち腐敗の克服のためにもっとも基本的なことは、タイ官僚の行動様式にみられる伝統的な「人への忠誠」を克服して職務そのものに対する忠誠心を培うことである、としている。またタイ国行政にみられる非能率性の原因としては、組織上の欠陥とくに行政諸機関の無計画的な肥大増殖、過度の中央集権化、権限の分配にみられる諸欠陥、行政政策にみられる計画性の欠如、形式主義と法規万能主義をあげている。

はじめに述べたように、本書はまったくの入門書である。しかし、わが国ではタイ国行政の研究にはまだ全然手がつけられていないのが実情であるので、今後の研究のための手掛りの一つとして紹介することにした。
(福島徳寿郎)

The Mrabri: Studies in the Field (The Journal of the Siam Society, Vol. LI Pt. 2). Bangkok, 1963. 68p. (= pp. 133-201) with lists and photos.

Mrabri は一般に“Phi Tong Luang”の名でよく知られたタイ国北部の放浪民で、その primitive な生活のため色々な関心が抱かれながら、少数であることと elusive な放浪のために接近が容易でなく詳しい実態はよく知られていない。The Siam Society Research Centre では1962年8月の第1回調査に次いで1963年1月末に再び Kraisri Nimmanahaeminda 氏をヘッドに第2回目の Mrabri 調査を Amphur Na Noi (C. Nan) の山中で行なった。本書は、JSS の1号をこの第2回調査の報告に特集号として割当てたものである。

内容は5篇の論文からなっている。すなわち、(1) J. J. Boeles 氏の、この調査のあらましと material culture を主とした文化人類学的な報告、(2) 西独 Bonn から参加した Dr. G. Flatz の形質人類学的報告、